

は、すごい羨ましいなって思います。」

もっとも、学生が抱く印象には、教育実習経験が大きく影響しており、Cの場合は小学校と言っても、個別支援学級という対象人数が比較的少ない条件下であったことが幸いしたようである。

「人とかかわることができる」ということも複数の回答者が語っており、教職選択に関連する基盤的な意識として位置づけられる。また、教科や学問（教育学など）が好きで興味があったという「教える内容」への関心もいくつか見られた。さらに、教員との出会いの直接的影響も若干例確認することができた（Sなど）。加えて、家族が教職にかかわり始めた経験から影響を受けた例も複数見られた（Qなど）。

たとえば、Qは、教職の魅力を下のように表現している。

「教師の仕事は、自分の持った学級の子どもたちと毎日関わっていくので、一人ひとりに深く接することができたり、その子どもたちも日々違うので、毎日子どもたちから新鮮な新しい発見とか、何か新しい気づきだったり、そういう点で日々楽しい。教師としても成長できるだろうし、自分なりに色々考えて実践しやすい場なので、仕事としては、1日すごく早く終わりそうな、色んなやることも詰まってるし、やっぱり楽しいお仕事って一瞬に感じると思うので、そういう意味でも、もう常に色んな意志を持ちながら、子どもたちと関わり合って、トライアンドエラーを繰り返しながら取り組める、やりがいのあるお仕事だなっていう風には感じます。…」

加えて興味深いのは、現状がこうだから…と受け止めるだけではなく、もっとうまくできるのではないかという気持ちを出発点としたり（P）、自身が受けてきた教育への違和感を動機として述べたりする者もいた（T）ことである。さらには、教員の働き方について疑問を持ち、その解決への想いを強くして進学したケースもある（A）。これらの現状変革的な意識を若者が持っていることはきわめて貴重である。しかし、それを諦めさせ気持ちを萎えさせる何かが存在していることは深刻に受け止められなければならない。

もしかしたら、私たちは教職への動機を一元的に描き過ぎてきたのかもしれない。こちらの描いた物語ではなく、もっと当事者の視点に立って現状を変えていきたいという思いに応答し、かれらと一っしょに力を合わせて変えていく。そのような前向きな物語を描き切れていないことがきわめて深刻な事態を招いているのではないだろうか。

## **(2) 教職の離脱をめぐる4つの類型について**

大まかに図式化すると、教職との向き合い方には4つのパターンがある（図1参照）。